

老人力

一般社団法人日本想続協会
代表・税理士 内田麻由子

ヘルマン・ヘッセは「年をとるということは、たしかに体力が衰えてゆくことであり、生気を失ってゆくことであるけれど、それだけではなく生涯のそれぞれの段階がそうであるように、その固有の価値を、その固有の魅力を、その固有の知恵を、その固有の悲しみをもつ」といいます。老いに抗うのではなく、老いを肯定的に捉えてみたい。

●赤瀬川原平さんの「老人力」

今年（2014年）10月に77歳で亡くなった芸術家・作家の赤瀬川原平氏。1998年に著した『老人力』でユーモアたっぷりに老人を称賛し、「老人力」は流行語にもなりました。

赤瀬川さんの提唱する「老人力」は、「まだまだ若いものには負けんぞ」という、がんばり型老人力ではありません。もちろん「年寄りなんだからしかたないでしょ、大目に見てよね」という、開き直り型老人力でもありません。

赤瀬川さんは、老化現象を笑いに変え、独自の視点で老いに新たな価値観を見出しました。老いを楽しみ、老いを肯定する、いわば「老人賛歌」です。

たとえば、物忘れ。誰にでもありますね。人や物の名前が出てこない。財布を家に忘れて外出する。友人との約束をすっぽかす。自転車でスーパーに買い物に行き、歩いて帰ってくる――。私も年をとったなあと、誰しもがっかりします。しかし赤瀬川さんはこれを「忘れる力」と肯定的に定義します。「ものを覚えることは努力すればできる。でも忘れることは努力してもできない」というのです。確かにそのとおりです。失敗したことや腹が立ったことなど、早く忘れてしまったほうがいいこともあります。

よく野球の監督がバッテリーに「力を抜いて行け」と助言しますね。この「力を抜く」のも赤瀬川さん曰く「老人力」です。選手はこれまで強くなるために努力を重ねて力をつけてきました。でもここ一番という時には、力を入れるのではなく力を抜いたほうがヒットを打てる。「力を抜いて行け」はつまり「老人力で行け」ということなのだ。

現代の情報化社会では、多くの情報を素早く得ることが望ましいとされます。しかし情報の渦に埋もれていると、自分というものが見えづらくなる。情報はガンガン捨てた方がいい。「宵越しの情報は持たねえ、みたいな江戸っ子老人力」を勧めます。

「老人力とは、転んでもただでは起きない力のことである。ボケるには違いないけど、そのボケを何とか自分の人生の得点とする。物忘れはたしかだけど、それをたとえばゆとりとして活用する。まあやり方はいろいろだけど、超スローモーションのようにゆっくりと転んでいきながら、その裏側でゆっくりと、ただではなく起き上がっていく」

『老人力』を読んで、なんだか老人になるのが楽しみになってきました。

●老いは幸運の果実

宗教学者の保坂俊司氏は「老いは幸運の果実である」といいます。

当然のことでありながら意外に自覚されないことですが、老いとは幸運の積み重ねの結果迎えられるもので、「老いは幸運の果実である」という事実です。…中略…老いを問題にできるということは、実は大変幸福なことである、といえるわけです。それは多くの若者が戦争で亡くなった第二次世界大戦時のことを考えれば明白です。したがって、老いに関する諸問題を考える場合には、まずこの大前提を確認し、老いに至った幸運に感謝することが大切ではないでしょうか。

東アジアのような農耕、特に水田稲作農業を中心とする地域では、老いは神の域に近づくこととして尊ばれてきた伝統があります。この地域では、古来神のイメージは顔に深い皺を刻み、白髪、白い髭を蓄えた老人の姿です。それは老人に備わる経験知が農事と密接不可分であったからでもあります。やはり老いを幸運や幸福の象徴と考えてきた東アジア人の智慧が生きていると思われれます。

(『中村元「老いと死」を語る』収録「老いに怯え死に慄く日本社会へ仏教からの提言」)

●最上のわざ

老いて人の役に立たなくなっても、親切で柔和な人であることはできます。何もできなくなっても、愛する人のために祈ることはできます。私の好きな詩です。

「最上のわざ」 ヘルマン・ホイヴェルス

この世の最上のわざは何？ 楽しい心で年をとり、働きたいけれども休み、しゃべりたいけれども黙り、失望しそうなときに希望し、従順に、平静に、おのれの十字架をになう――。

若者が元気いっぱい神の道を歩むのを見ても、ねたまず、人のために働くよりも、けんきょに人の世話になり、

弱って、もはや人のために役だたずとも、親切で柔和であること――。

老いの重荷は神の賜物。古びた心に、これで最後のみがきをかける。

まことのふるさとへ行くために――。

おのれをこの世につなぐくさりを少しづつはずしていくのは、真にえらい仕事――。

こうして何もできなくなれば、それをけんそんに承諾するのだ。

神は最後にいちばんよい仕事を残してくださる。それは祈りだ――。

手はなにもできない。けれども最後まで合掌できる。

愛するすべての人のうえに、神の恵みを求めるために――。

すべてをなし終えたら、臨終の床に神の声をきくだろう。

「来よ、わが友よ、われなんじを見捨てじ」と――。



閑古錐（かんこすい）とは、長年使って先の丸くなった錐のことです。松原泰道禅師は「世の中というのは、切れよ切れよの鋭い人間だけではだめで、閑古錐のような丸い人間が必要だ」といいます。今日の殺伐とした競争社会で、老人は若者とは異なるモノサシを持ちたい。隣人の命と平和を大切にし、皆の幸せのための智慧と行いが、老人には求められます。いつも笑顔をやささず、他者に温かい言葉をかけ、その場にいるだけで周囲を和やかにするような、心のまあるい「老人力」のある老人になりたいものです。